

絶対温度  $T_H$  の高熱源と、絶対温度  $T_L$  の低熱源を用いて、カルノー機関を考える。カルノーサイクルの各過程における、系 (理想気体の 1 モル) のする仕事  $W^{\text{気体}}$  と系が吸収する熱量  $Q$ 、即ち

1. 等温  $T_H$  の下で、体積が  $V_A$  から  $V_B$  に膨張する過程 (i) において気体のする仕事  $W_{AB}^{\text{気体}}$  と系が吸収する熱量  $Q_{AB}$
2. 断熱膨張過程 (ii) において気体のする仕事  $W_{BC}^{\text{気体}}$  と系が吸収する熱量  $Q_{BC}$
3. 等温  $T_L$  の下で、体積が  $V_C$  から  $V_D$  に圧縮する過程 (iii) において気体のする仕事  $W_{CD}^{\text{気体}}$  と系が吸収する熱量  $Q_{CD}$
4. 断熱圧縮過程 (iv) において気体のする仕事  $W_{DA}^{\text{気体}}$  と系が吸収する熱量  $Q_{DA}$

を求め、それらを用いて、カルノーサイクルの効率  $\eta$  が

$$\eta = 1 - \frac{T_L}{T_H} \quad (1)$$

となることを示せ。ただし、気体定数を  $R$  とする。

ここで必要な熱力学第一法則と理想気体の性質を列挙すると

第一法則 : (内部エネルギーの変化) = (系が吸収した熱) - (系〔気体〕のした仕事)

$$\rightarrow dU = dQ - dW^{\text{系〔気体〕}}$$

理想気体の 1 モルの状態方程式 :  $PV = RT$

内部エネルギー :  $U(T) = C_v T + \text{constant}$

断熱過程 :  $PV^\gamma = \text{constant}$  or  $TV^{\gamma-1} = \text{constant}$  ( $\gamma$  : 比熱比)

各過程における気体がする仕事と系が吸収する熱量は、次のようになる。

1. 等温過程 (i)  $A(P_A, V_A) \rightarrow B(P_B, V_B)$ , ( $V_A < V_B$ );  $T = \text{constant} = T_H$

$$\begin{aligned} W_{AB}^{\text{気体}} &= \int_{V_A}^{V_B} P dV \quad (\text{ただし、} PV = RT_H) \\ &= \int_{V_A}^{V_B} \frac{RT_H}{V} dV \\ &= RT_H \log \frac{V_B}{V_A}. (> 0) \end{aligned} \quad (2)$$

得られた結果を等温過程に対する第一法則に代入すると  $Q_{AB} - W_{AB}^{\text{気体}} = 0$ .

$$\therefore Q_{AB} = RT_H \log \frac{V_B}{V_A} > 0 \quad (3)$$

となり、系は高熱源から  $Q_{AB}$  の熱量を吸収する。

2. 断熱膨張過程 (ii)  $B(P_B, V_B) \rightarrow C(P_C, V_C)$ ;  $d'Q = 0$

$$\begin{aligned} W_{BC}^{\text{気体}} &= \int_{V_B}^{V_C} PdV \quad (\text{ただし、} d'Q + (-pdV) = dU) \\ &= \int_{V_B(T_H)}^{V_C(T_L)} PdV \\ &= -C_v(T_L - T_H) \\ &= C_v(T_H - T_L). \end{aligned} \tag{4}$$

断熱過程であるから  $Q_{BC} = 0$ .

3. 等温圧縮過程 (iii)  $C(P_C, V_C) \rightarrow D(P_D, V_D)$ ;  $T = \text{constant} = T_L$

$$\begin{aligned} W_{CD}^{\text{気体}} &= \int_{V_C}^{V_D} PdV \\ &= RT_L \log \frac{V_D}{V_C}. \quad (< 0) \end{aligned} \tag{5}$$

第一法則より,  $Q_{CD} - W_{CD}^{\text{気体}} = 0$

$$\therefore Q_{CD} = RT_L \log \frac{V_D}{V_C} \quad (< 0) \tag{6}$$

となり、系は低熱源へ  $|Q_{CD}|$  の熱量を放出する。

4. 断熱圧縮過程 (iv)  $D(P_D, V_D) \rightarrow A(P_A, V_A)$ ;  $d'Q = 0$

$$\begin{aligned} W_{DA}^{\text{気体}} &= \int_{V_D}^{V_A} PdV \quad (\text{ただし、} d'Q + (-pdV) = dU = C_v dT) \\ &= (-) \int_{V_D(T_L)}^{V_A(T_H)} C_v dT \\ &= C_v(T_L - T_H). \end{aligned} \tag{7}$$

断熱過程であるから  $Q_{DA} = 0$ .

以上より、1 サイクル ( $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D \rightarrow A$ ) での系 (理想気体) のする仕事

$W_{ABCD}^{\text{気体}}$  は

$$\begin{aligned} W_{ABCD}^{\text{気体}} &\equiv W_{AB}^{\text{気体}} + W_{BC}^{\text{気体}} + W_{CD}^{\text{気体}} + W_{DA}^{\text{気体}} \\ &= RT_H \log \frac{V_B}{V_A} + RT_L \log \frac{V_D}{V_C} \\ &= Q_{AB} + Q_{CD} \end{aligned} \tag{8}$$

となる。また、系 (理想気体) が吸収する熱量  $Q_{ABCD}$  は

$$Q_{ABCD} = Q_{AB} = RT_H \log \frac{V_B}{V_A}. \tag{9}$$

従って、カルノーサイクルの効率  $\eta$  は

$$\begin{aligned}\eta &\equiv \frac{W_{\text{気体}}^{ABCD A}}{Q_{ABCD A}} \quad (\text{ただし、} Q_{CD} < 0, Q_{CD} = -|Q_{CD}|) \\ &= \frac{Q_{AB} + Q_{CD}}{Q_{AB}} \quad \left( \text{or } \frac{Q_{AB} - |Q_{CD}|}{Q_{AB}} \right) \\ \rightarrow \eta &= \frac{RT_H \log(V_B/V_A) + RT_L \log(V_D/V_C)}{RT_H \log(V_B/V_A)}.\end{aligned}\tag{10}$$

ここで断熱過程 (ii),(iv) においてポアソン法則より

$$\begin{aligned}T_H V_B^{\gamma-1} &= T_L V_C^{\gamma-1} \\ T_H V_A^{\gamma-1} &= T_L V_D^{\gamma-1} \\ \rightarrow \therefore \frac{V_B}{V_A} &= \frac{V_C}{V_D}.\end{aligned}\tag{11}$$

式(11)を(10)に代入すると

$$\begin{aligned}\eta &= \frac{R(T_H - T_L) \log(V_B/V_A)}{RT_H \log(V_B/V_A)} \\ &= 1 - \frac{T_L}{T_H}\end{aligned}\tag{12}$$

となり、カルノー機関の熱効率  $\eta$  は高熱源と低熱源の絶対温度の比のみに依存して、作業物質である系(理想気体)には依存しない結果が得られた。